

ベストピア Bestopia

「パリ通信 55号」

<http://jkoga.com/>

平成二十八年七月
第五十五号

< 2016年 7月 >

古賀 順子

UEFA EURO 2016

6月10日から4年に1度の「サッカー・ヨーロッパ・チャンピオンシップ 2016」(UEFA: Union des Associations Européennes de Football ヨーロッパ・サッカー協会連合主催)が始まりました。

「UEFA EURO」は、1960年に始まり、今年は第15回。今年から24チームが参加することになり、2008年・2012年二連覇を達成したスペイン、強豪ドイツ(1972年西ドイツ、1980年・1996年ドイツ優勝)に加え、5チーム(アイスランド、アルバニア、スロバキア、ウェールズ、北アイルランド)が初出場。開催国はフランス、パリ(サン=ドニ・スタジアム)、マルセイユ、ボルドー、リヨン、トゥールーズ、リール、サン=テチエンヌなどフランス各地10ヶ所で、AからFの6グループに分かれ、試合が行われました。

昨年11月13日のパリ・テロ事件、今年に入りフランス各地で続いている一連のストライキ、労働法改正に反対するデモ行進に乗じた破壊行為など、フランス国内のセキュリティが心配された大会でした。事実、開催翌日の「ロシア・イギリス戦」(マルセイユ)では、両国の熱狂サポーターが暴力行為に及び、港前の広場で35名の重軽傷者が出ました。会場付近でのアルコール販売を禁止、テラスの椅子やテーブルは固定する、街で対戦国同士が接触しないよう警官・警備員を配置するなどの対応でしたが、試合のある日はお店を閉めるカフェやレストランもありました。「ポーランド・アイルランド戦」の日、ニュースでガラス瓶を投げ合うなどの小競り合いもありましたが、その後は大きな衝突はなく進行しました。

過去2回の優勝(1984年スペインと決勝2-0)(2000年イタリアを2-1で破って勝利)を経験しているフランスは、16年振り3回目の優勝を目指したい参加です。今回は、ジネジン・ジダンやティエリー・アンリといったスター選手がいないフランスチームで、開催まで

はフランス国内の期待も今一つでしたが、試合毎にチームワークが強化し、ポルトガルとの決勝に残りました。

7月10日(日) 21時。パリにもようやく夏の陽射しが訪れ、サン=ドニ・スタジアムは「アレ・レ・ブルー」(フランス・チームのユニホームは青。フランス頑張れ!の意)の声援で暑い熱い試合がスタート。生中継をしたM6(テレビ局)の発表では、2,000万人を超える視聴者数(フランスの人口は6,600万人強)で、圧倒的なサッカー人気を証明しています。人と同じことはしたくない、上と下は交わらない、宗教も人種も価値観も様々で、「多様性」に集約されるフランスですが、サッカーだけは例外のようです。準決勝からは、オランダ大統領・ヴァルス首相が揃ってスタジアム観戦。カフェ、レストラン、市役所、体育館、キャンプ場などに特別設置された大型モニターに集まったサポーターや市民が一つになっての大応援。一喜一憂、試合にのめり込んだ真剣なテレビ観戦です。

前半25分、レユニオン島出身デイミトリ・パイエットと接触したクリスチアーノ・ロナルドは、膝を傷め、涙の退場。この瞬間、誰もがロナルドのいないポルトガルにフランスは圧勝すると思っていました。ところが、ポルトガルの守りは固く、0-0で延長戦に突入。今大会、延長戦やPK戦を繰り返し、忍耐に忍耐を重ねて勝ち上がってきたポルトガル。早い時点で得点出来なかったフランスは勝機を逸し、延長戦後半109分、エデルのシュートでポルトガル勝利。ポルトガルが初めてヨーロッパ・チャンピオンを獲得。悔し涙が歓喜の涙に変わり、脚を引き摺りながら優勝杯を高く掲げるロナルドの姿が今大会を要約していました。フランスの若手アントワヌ・グリエズマン(25歳)が、大会を通して6ゴールで得点王にはなりましたが、決勝で敗北したショックは大きく、フランス中に浸透。優勝し、一晩中騒ぐつもりが、シーンと白けた夜になり、立直るにはしばらく時間がかかりそうです。